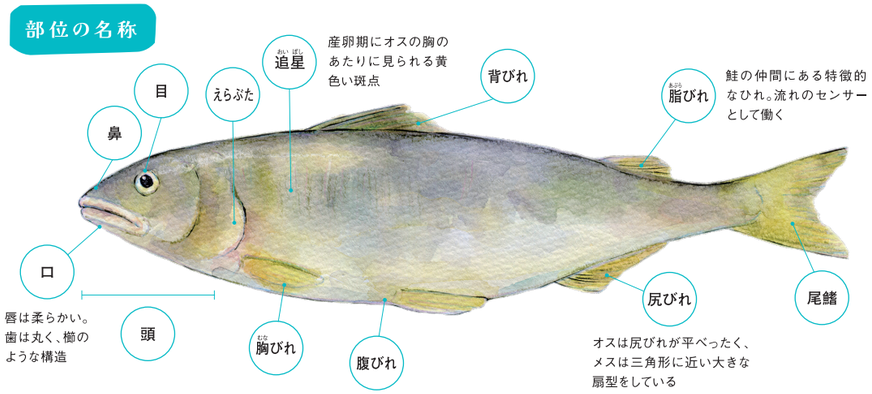
一年という短い寿命で海と川を旅して生きる

秋、鮎の短い一生が始まります。川の中下流域で卵から孵ると、水の流れに乗って海に下り、海岸近くの浅い場所で冬を過ごします。春が来るまではプランクトンを食べて育ち、水があたたかくなると、海から川への旅が始まります。群れになって上流を目指す鮎たち。このころには、川の流れに負けないくらい立派に育っています。上中流域まで上ると、縄張りを作り、さらに大きく成長していきます。餌は、底の石に生えた「コケ」や「アカ」と呼ばれる藻類です。水が澄んでいて光がよく届き、上質な藻類が豊富な長良川。藻類は水中の二酸化炭素や窒素、リンなどを吸収し、水をきれいにします。その藻類を鮎が食べることで次々に新しい藻類が育ち、また水がきれいになる。この好循環により、保たれる自然の生態が、おいしい鮎の源なのです。秋が近づき水が冷たくなってくると、鮎たちは再び川を下り、中下流域で産卵します。そして、卵を産み終えると、わずか1年の一生を終えるのです。

部位の名称



産卵期の鮎

遡上の様子

鮎の一生

鮎の呼び名いろいろ

清流の女王（せいりゅうのじょおう）

鮎は澄んだ水を好む。濁った水中では生きられないため、水のバロメーターともいえる。

年魚（ねんぎょ）

秋に川でふ化し、次の秋に産卵をする鮎。1年で一生を終える。

香魚（こうぎょ）

体からスイカのようなよい香りが漂う。香りは餌として食べる苔（こけ）によって変わるといわれる。

喧嘩魚（けんかうお）

川で縄張り争いをする鮎。その鮎をめぐって漁師は漁場争いをし、その後は魚屋が奪い合うことから、いつしか喧嘩魚と呼ばれるようになった。

笑顔を呼ぶ魚（きちをよぶさかな）

神功皇后が朝鮮出兵の際、神に祈念しながら川に糸を垂れたところ鮎が釣れ、皇后は無事に航海できたなどの縁起のよい話が残っている。